

序章

認識論・方法論・調査手法

児玉 由佳

要約

方法論は、本来調査手法を選択するための基本方針であり、具体的な調査手法と混同されがちだが、調査手法とは明確に区別する必要がある。調査者の認識論的な信念から出発した問題意識が具体的な調査手法にたどりつくまでの一連のプロセスのなかで、方法論は有効な調査手法を選択するための重要な役割を果たしている。

キーワード

認識論、方法論、調査手法

はじめに

本研究会の目的は、ジェンダー研究における方法論（methodology）をめぐる議論について検討を行うことにある。この目的の背景には、ジェンダーに関する質的研究を進めるにあたって、ジェンダー固有の方法論について、その有無も含めて検討すべきではないかという問題意識がある。

この章では、個別具体的なジェンダーの方法論の議論に入る前に、方法論と関連する用語について概念整理をしておきたい。なぜならば、方法論は、本来調査手法を選択するための基本方針ともいえるべき位置づけにも関わらず、具体的な調査手法（methods）と混同されがちだからである[Crotty 1998, 1]。本来社会調査は、研究者の認識論（epistemology）的な立ち位置から生まれた問題意識をもとに解明すべき課題を決定し、それに適した調査手法を選択するという一連のプロセスをたどるべきものである[Crotty 1998, 4]。そのプロセスの中で、方法論は抽象度の高い認識論レベルと具体的な調査手法との間の仲介として重要な役割を果たすことが期待されている。

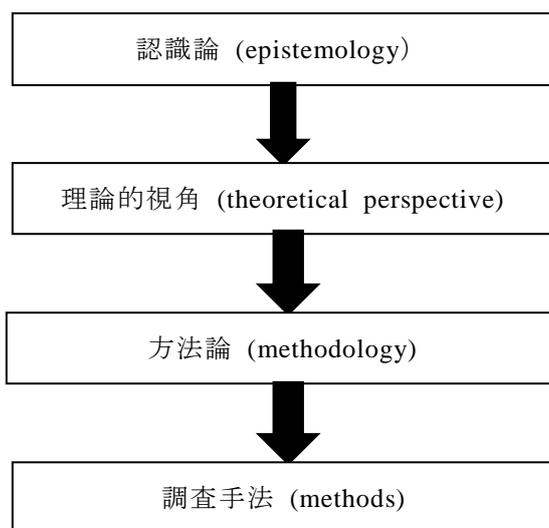
本章では、まず、Crotty [1998]による社会調査に関する一般的な議論をベースに、

具体的な調査手法が認識論的議論へとつながるプロセスを段階を追って検討していく。次に、フェミニズム分析に有効な方法論の一つであるスタンドポイント・アプローチの提唱者であるHarding [1987]による方法論に関する議論を簡単にだが紹介したい。

I Crotty [1998]による社会調査の一連のプロセス

Crotty [1998]は、調査計画において特定の調査手法 (methods) を選択する場合、それを正当化するためには、方法論 (methodology) 、理論的視角 (theoretical perspective) 、認識論 (epistemology) の3つの段階それぞれにおいて、何をなぜ選択しているのか自覚的であるべきであるとする。調査手法を含めた4つの段階の関係性は、下図のとおりになる。

図 認識論から調査手法までの流れ



(出所) Crotty [1998, 4]をもとに筆者作成。

図では、最上位にある認識論がもっとも抽象度が高く、下に行くほどより具体的な形をとる。プロセス自体は必ずしも認識論から出発する必要はないが、問題意識の提示や仮説を立てる段階で、それらがどのような認識論に基づいたものなのか、どこに理論的視角を置いているのかについては、調査者の自覚が必要である[Crotty 1998, 12-14]。

各段階についてのCrottyの説明をまとめると、以下のとおりである[Crotty 1998, 3]。上位概念は下位概念との関係性から説明されているため、説明の順番は、もっ

とも具体的な調査手法から上の段階へと進んでいく形をとる。

まず、調査手法とは、特定の調査課題や仮説に関連したデータを集めて分析するためのテクニックやプロセスである。具体的には、インタビュー、サンプリング、統計分析、参与観察、質問表の作成などがある。

次に、方法論とは、関心のある事柄を解明するにあたって、どのような調査手法を選択すればそれが可能になるかについての戦略またはリサーチ・デザインのことをさす。方法論は、抽象的な概念を具体的な調査手法へと落とし込んでいくにあたって、仲介の役割を果たすことになる。このレベルでCrotty [1998, 3]が挙げているのは、サーベイ調査、エスノグラフィー、言説分析、フェミニスト・スタンドポイント分析などである。

そして、方法論の基盤となる哲学的スタンスが、理論的視角となる。理論的視角は、「方法論の論理と基準の基盤」である[Crotty 1998, 3]。実証主義（positivism）、現象学、フェミニズム、ポストモダニズムといったものが、理論的視角の例として挙げられている。

最後に、理論的視角や方法論の本質にある知識論（theory of knowledge）として、認識論がある。この段階に当てはまるものとして、構築主義（constructionism）、客観主義、主観主義が挙げられている。

各段階でそれぞれ例を挙げたが、その例は段階ごとに項目を任意に選べるものではなく、認識論の段階で特定の理論を選ぶと、その後の段階ではそれに見合うものを選ぶことになる。たとえば、認識論の段階で構築主義や主観主義を選んだ場合、理論的視角の段階では客観主義を基盤にもつ実証主義は除外されることになる。ただし、100パーセント純粋な主観主義を標榜するのではなく、折衷主義的なアプローチをとる場合もあるので、このような除外の手順は必然ではない[Crotty 1998, 12]。ただし、その選択のプロセスにある程度の一貫性がないと、調査において期待されたデータを収集することができなくなる恐れがある。Crotty[1998]は、調査手法選択にあたって、その背後にある自らの持つ思想や価値観について自覚すべきであると指摘しているのである。

このようにCrotty [1998]は、調査研究について重要な提言をしているが、4段階のプロセスの分類が適切かどうかについては検討の余地がある。特に、どちらも「信念」を扱っている認識論と理論的視角の線引きは難しい。たとえば次節で紹介するHarding[1987]のフェミニズムにおける方法論の議論では、認識論、方法論、調査手法の3段階となっており、認識論と理論的視角は、同じグループとして扱われている。

II Harding [1987]によるフェミニズムにおける方法論に関する議論

Harding [1987]は、調査手法の段階で、女性を調査項目に加えるだけでは、女性を取り巻く権力関係などを解明することはできないことを指摘し、新たな認識論と方法論の確立を求めた。その問題意識のもと、Harding [1987]は、調査手法、方法論、認識論を以下のとおり分類し説明している。

まず、調査手法は、Crotty [1998]同様「証拠を集めるテクニック」であり、インフォーマントからの聞き取り、観察、歴史的な情報や記録の収集などが挙げられている。これらは必ずしもフェミニズムに特化したものではなく、通常の質的調査の手法である[Harding 1987, 2]。ハーディングが調査手法の段階で危惧するのは、既存の調査手法への単純な女性の追加や、インフォーマントの男性から女性への変更といったレベルでは、男性からみた社会関係を後追いすることにすぎず、新たな知見を得ることはできないという点である[Harding 1987, 3-5]。

女性をとりまく権力関係を分析するための有益な調査を行うためには、調査手法よりも一段階上の方法論の吟味が必要である。Hardingのいう方法論は、「調査をどのように行い、進めるべきかに関する理論と分析」と定義づけられている。たとえば、「どのように機能主義（またはマルクス主義的政治経済や現象学）を特定の研究領域に適用すべき、または適用しているのかを検討するのが方法論的分析」であるとしている[Harding 1987, 3]。方法論は、上位概念を現実の調査に結びつける役割を期待されているといえよう。

したがって、Harding [1987]の議論での方法論は、方法論を調査手法のための戦略、リサーチ・デザインとしたCrotty [1998, 3]よりも抽象度が高い。たとえば、本書第一章で取り上げるスタンドポイント・アプローチは、方法論として位置づけられることが多いが[Smith 1987; Hartsock 2004(1983); Hirschmann 2004(1997)]、その提唱者の一人であるHardingの特に初期の議論では、スタンドポイント・アプローチ自体を認識論として扱っている場合も多い[Harding 1987]。

最後に、認識論とは「知識論」(a theory of knowledge)であり、「信念を正当化するための戦略」であるとする[Harding 1987, 3]。この点はCrotty [1998]と同様であるが、Harding [1987]で検討されている認識論は、Crottyのものほど抽象度が高くなく、Crotty [1998]でいう認識論と理論的視角が統合されたものを認識論としていると考えられる。[Harding 1987]では、だれが「知識」の持ち主なのか、その知識を正当なものだと判断する信念とは何なのか、どのような「知識」を得られるのかといった疑問に対する答えが、認識論レベルの議論であるとする。フェミニストの視角からいえば、伝統的認識論は女性が「知識の持ち主」(“knowers”)であることを否定し、男性側の科学や歴史しか取り扱っていないため、それに変わる新しい認識論(=

フェミニズム)が必要であるということになる。したがって、Crotty[1998]が理論的視角に分類したフェミニズムは、Hardingの分類では認識論となる。

むすびにかえて

Crotty[1998]やHarding[1987]の方法論については社会調査に関する議論は、社会調査をおこなうにあたって調査者が自らの認識論的立ち位置から調査手法にいたるまで、信念や問題意識が一貫したものになっているのかを自覚的に問い直すべきであるということを示唆している。

方法論は、抽象度の高い認識論を具体的な調査手法に落としこむにあたって、仲介の役目を果たすことになるが、その方法論の選択も、解明すべき問題を明確に認識して初めて可能になるのである。

参考文献

[外国語文献]

Crotty, Michael 1998. *The Foundations of Social Research : Meaning and Perspective in the Research Process*. London: SAGE.

Harding, Sandra 1987."Introduction: Is There a Feminist Method?". in *Feminism and Methodology*, ed. Harding. Bloomington: Indiana University Press.

Hartsock, Nancy, C.M. 2004(1983)."The Feminist Standpoint: Developing the Ground for a Specifically Feminist Historical Materialism." in *The Feminist Standpoint Theory Reader: Intellectual and Political Controversies*, ed. Harding. New York: Routledge.

Hirschmann, Nancy, J. 2004(1997)."Feminist Standpoint as Postmodern Strategy." in *The Feminist Standpoint Theory Reader: Intellectual & Political Controversies*, ed. Harding. New York and London: Routledge.

Smith, Dorothy E 1987. *The Everyday World as Problematic: A Feminist Sociology*. Boston: Northeastern University Press.